慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：中絶という選択において「親となる」葛藤をみつめる： リュック・ボルタンスキー著『胎児の条件： 生むことと中絶の社会学』小田切祐詞訳、法政大学出版局、2018年
Sub Title	
Author	澤田, 唯人(Sawada, Tadato)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.186- 190
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：中絶という選択において「親となる」葛藤をみつめる

リュック・ボルタンスキー著『胎児の条件――生むことと中絶の社会学』
小田切祐詞訳、法政大学出版局、2018 年

澤田　唯人

本書が刊行される数か月前、担当する集中講義を受講していた社会人学生（20 代）の女性から、授業期間中に人工妊娠中絶をしたと打ち明けられたことがあった。そのときが、中絶を経験した女性との初めての出会いだったこともあり――いや、たんにこれまで打ち明けられたことがなかっただけなのかもしれない [1]――、私は何と応えてよいかわからず、会話も途切れ途切れとなってしまい、彼女はその場をあとにした。授業期間が終わり、メールをもらう機会があった。本書の書評に入る前に、ご本人の許可を得て、その一部を紹介したいと思う。

> ［授業期間］開始直後の○月○日、私のお腹に命が宿っていることがわかりました。喜ぶべきはずが、私は△月に持病の再手術を控えていて、その手術で病気がひと段落するような予定となっていた最中であったために、妊娠の自己検査を××校舎のトイレで行い、陽性の印が出て気を失いそうになったことを鮮明に覚えています。病状的に絶対に産めないわけではないと主治医には言われましたが、やはり私たちにはバースプランが明確にあったことや、何より病気がある程度安定しない中で、妊婦を 10 ヶ月間過ごし、一から子どもを育てるのは、経験があるからこそ無理だと気持ちは固まっていました。そしていかに早くお腹の命が成長するかを、娘の妊娠時によくわかっていたので、まだ 4 週目くらいの命であったこともあり、パートナーにも私の意見を尊重してもらい、勝手にすぎない気持ちなのは百も承知の上、「心音が聴こえるようになる前に 1 日も早く手術をしてください」と医師に依頼し、授業を 1 日だけ休み、○月△日に手術を受けました。まさかこの時期にこんなことになるなんて…という気持ちと、出産と中絶の両方を経験し、どちらも親としての一生の責任であることに変わりはないが、もしかすると中絶という選択・責任の方が、母親として精神的な苦しさは大きいのかもしれないと思っています。そんな出来事が起きてしまい、正直この期間は、授業を受けれるような精神状況ではとても無かったと今振り返っても思っています。授業内容が頭に入らず上の空のような時もあったように思うし、いきなり涙がこぼれてくる日もあった。ただ、それでも私は「亡くなった命の分まで生を全うしなくてはいけない」と覚悟を決めて、予定した通りすべての授業に出席をしました。

この、ある一人の日本女性の経験と、中絶をめぐる人間学的考察やフランス社会でのインタビュー調査から「人間」が生まれてくることの条件を問うた本書との結び目をつくること。本

澤田唯人「書評：リュック・ボルタンスキー著『胎児の条件――生むことと中絶の社会学』」
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）186-190 頁

書評はかなり限定的な読みではあるが、そこに浮上する問いについて考えてみたい[2)]。

著者 L. ボルタンスキーによれば、「中絶」という普遍的に知られている実践の可能性が示すのは、何よりもまず、妊娠中に「胎児」に対して何らかの存在規定がなされなければ、この存在は生まれてくることができない、という点である（自然流産は除く）。胎児が、ほかの誰とも取り替えがきかない個別的な人間として生まれてくることができるためには、すなわち取り替え可能な存在（「今はまだ育てられない」など）として取り除かれないためには、たんに女性の中に「肉」として存在するだけでなく、「ことば」による象徴的行為――お腹を触る、語りかける、固有名を授けるなど――を通じて、その人間性が認証されなければならない。著者はこの象徴的過程を「家族として迎え入れること」と表現する。

このプロセスは、歴史的には、超個人的な審級――神（すべての存在を認証）、親族（嫡出性に基づく認証）、産業国家（社会的有用性に基づく認証）――によって、あらかじめなされ、妊娠した女性自身が自律的に認証の可否を選択することは長らく難しかった。そして、これらの審級が社会の変化により効力を弱めた現代でも事情は変わっておらず、新たな超個人的な審級が登場しているという。それが、「親となるプロジェクト（計画）」である。

避妊技術の発展により性行為と生殖の分離が進むと、生殖はコントロール可能であり、妊娠は計画的になされるプロジェクトという側面が強まっていく。「親となるプロジェクト」のもとでの計画的な妊娠であれば、すでに胎内の存在は家族の一員として生まれてくることがあらかじめ認証される。だが、計画的でない妊娠は、事前の認証がないため、その後に「親となるプロジェクト」が立ち上がるか否かが、胎児を家族として迎え入れるか否かを左右する。経済的事情や別のプロジェクト（仕事や学業など）との兼ね合い、パートナーとの関係などにより長期的な見通しが立たない場合、胎児の人間性が認証される過程は抑制され、多くの場合、胎児は腫瘍（できもの）と同じようなものとして扱われ、取り除かれる（医療者もエコー検査などでは「赤ちゃん」ではなく、「組織」や「娩出物」などと呼ぶ）。

だが、こうした中絶の過程が傍目には首尾よく進んだとしても、それに直面している女性には厳しくつらい経験となる。著者によれば、胎児は女性にとって「私であり、かつ私でない何か」という自他未分の曖昧な存在として現われ、中絶をめぐって二種類の暴力をもたらすからである。一つは、この存在が避け難く胎内にいることによって女性にもたらされる暴力。もう一つは、中絶をすることによって胎児だけでなく自分自身も被ることになる暴力である。妊娠の特殊性は一方に何かが起きれば、必ず他方にも何かが起こることになるという点にある。したがって胎児からのさまざまな触発――胎動、重み、つわり、身体の変形など――を通じて女性に湧き起こる不安や充足といった感情は、自らの意志では制御できない「肉の意志」として顕現しながら、同時に何事かを訴える自分自身のことばかのように経験される。著者は述べてはいないが、この触発的な感情（肉の意志）は、腫瘍のようなものがそこに「ある」のではなく、まさに応答可能性をもつ存在がそこに「いる」ということを否応なく告げ知らせる。

こうした局面に曝される女性は、偶発的に生じたこの自分であり自分でない何かを――生む

決断をするにせよ、中絶を決断するにせよ――、差し迫る期限の中で想像力を介して引き剥がし、主客の分離をし、対象化することで自分自身の「制御の意志」を取り戻さなければならない。著者によれば、このように女性がそのあいだを揺れ動く「肉の意志」と「制御の意志」との葛藤を調和する転換子となるのは唯一、何らの見返りをもとめない無根拠な愛による生むという決断以外にない。そのため、胎児からの絶え間ない触発が終わらない限り、たとえ中絶を決断していても、女性は何度も自他未分的な「肉の意志」へと連れ戻され、「制御の意志」による決断をかき乱され、無効化され、葛藤を呼び起こされ続ける。「なぜ（いつか生まれる、あるいはすでに生まれた）あの子の人間性は認証されるのに、この存在は殺されるのか」――胎児からの触発のレベルでは、あの子とこの子がもたらす感覚はほぼ同じであり、この選別を正当化する根拠など何もないことが問い質される。だからこそ、女性は一刻も早く中絶の手術（処置）を望むのだと著者は言う。

だが中絶を終えても、こうした「肉の意志」は、こんどは女性の身体にその「喪失」や「空白」という形で痕跡を残し続ける。それゆえ女性たちは、失われた存在に自らの行為を弁明することになる。しかしそれは、「ほかに選択肢がなかった」「たとえ生まれてきても家族として迎え入れる『本当の父親』も『本当の母親』もいなかった」のだと、善としてではなく、より大きな悪を為さないために選択される最小悪の論理に基づいてしか語り得ない。それゆえ、自己の内に長く物語化されえない経験ともなるのである。

おおよそ、このように中絶の経験やそれを規定する現実を捉える本書の枠組みは、冒頭で示した女性の生きる現実についても多くの面で適合性をもっている。予定していたバースプランという「親となるプロジェクト」の審級の外部で生じてしまった妊娠は、彼女に「喜ぶべきはず」の経験を「気を失いそう」な事態として経験させ、不安定な自らの病状やその治療という別のプロジェクトとの兼ね合い、また先に生まれていた娘のときの経験などを踏まえると、彼女は胎内の存在の「親となる」見通しをもてなかった。それゆえ、この未だ「肉」としての存在をかけがえのない「家族として迎え入れる」過程は抑制され、彼女は「命」という抽象的な名でこの存在を呼んでいる。とはいえ、この存在が成長することで自身が触発的に抱くことになる感情を（娘のときの経験から）よく知っていた彼女は、「心音が聴こえるようになる前に一日も早く手術を」と願ったのかもしれない。そして、中絶後の喪失の中で抱いた「それでも私は亡くなった命の分まで生を全うしなくてはいけない」という痛切な覚悟は、何よりも、失われた存在を宛先として語られた「誓い」にも似た言葉として聴くことができる。

だが他方で、本書の枠組みを問い直すような経験の浮上を彼女の語りにはみてとることもできる。それは、本書の説明枠組みを構成する「親」や「家族」という概念に関わる。本書の枠組みにしたがえば、彼女は自らの胎内に宿った存在の「親となる」ばかりか、そのプロジェクトを立てることさえできなかった。しかし、にもかかわらず、「出産と中絶の両方を経験した」彼女は「どちらも親としての一生の責任であることに変わりはない」とし、「もしかすると中絶という選択・責任の方が母親として精神的な苦しさは大きいかもしれない」と語る。胎内の存

在が「家族」の一員として生まれてこなかったことは、彼女がこの存在の「親」になれなかったことを必ずしも意味していない。彼女が、すでにこの存在に「一生の責任」を負う「親」として苦しんでいることの意味は、胎児を「家族として迎え入れること」、あるいはそれができない「中絶」という経験の中で、「親となる」「家族となる」とは、いったいそもそもどのようなことなのかと本書に問い返す。

おそらく、この点を考えるための手がかりとなるのは、「家族として迎え入れる」（原語: adoption）という言葉から連想される親子関係の日本社会とフランス社会での差異である。日本では子をもつことは法律婚のもとでの家族と慣習的に強く結びついているが、フランスでは多くの場合、その外でなされる。子どもの約 6 割が結婚していない男女のあいだで生まれ、男女は同居していない場合もある。つまりフランス社会の文脈において、胎児の個別性を認証する過程は、その存在の「家族となる」ではなく、たんに「親となる」という意味で成立する。他方、日本で胎児の「親となる」には、その「家族となる」という未だ根強い嫡出性の論理のもとでなければならず、その意味で adoption が「家族として迎え入れる」と訳されたのも不思議ではない（フランスの文脈ではたんに「わが子として迎え入れる」になるだろうか）。これらの点を踏まえれば、日本社会には胎児の個別性をめぐる A.「嫡出性」に基づく認証と、B.「親となるプロジェクト」に基づく認証の二つの超個人的審級が存在しており、冒頭の女性の例は両者が食い違うことで起きていることが考えられる。彼女の胎内に宿った存在は、嫡出性に基づく審級 A のもとでは、すでに彼女と「親子」でありうる。だが、審級 B のもとでは、彼女とその胎児は「親子」と認証されてはならない。彼女はその意味でひき裂かれており、そしてだからこそ、この存在の「親とならない」という中絶の選択を、この存在の「親として」下したという一生の責任を背負わざるを得なかったのではないだろうか。

それは、彼女にとって一度は《抱き締めて》しまった存在のまえから、自らが姿を消さなければならないという経験に近かったかもしれない。妊娠という現実は、「私のお腹に命が宿っている」という彼女の語りが示すように、その発覚と同時に、ある存在をわが身に《抱きかかえる》という極めて象徴的な構図を女性に生きさせるからである [3)]。本書が論じた胎児からの触発は、この象徴的な構図が感覚的にも強く顕在化する一つの局面であり、それゆえ中絶に直面している女性に深い葛藤をもたらすのだと理解できる。しかしそれだけではなく、例えばごく初期に中絶を決断している状況であっても、《人混みの中でお腹をかばってしまった》、《誰にも打ち明けられず、この存在に話しかけるほかなかった》など、周囲の他者との関係によってこの象徴的構図が無視できないかたちで自らに露呈することは想像に難くない。だとすれば、ときに矛盾する審級のもとで中絶に直面する日本女性は、一方の審級によって、この《抱きかかえ》の構図がより露出しやすい、薄氷を踏むような状況に置かれているといえるだろう。

以上のように、「生むこと」と「中絶」をめぐって本書が提示する社会学的な視座や概念的道具立ては、それ自体が卓抜した考察に基づくだけでなく、ある一人の日本女性の経験を（もちろん一般化はできないが）理解するための多くの示唆や論点へと導いてくれる。現在、日本で

は新型出生前診断などの生殖補助医療の進展とともに、新しい形態の優生思想が懸念される一方で、WHO が推奨する「安全な中絶」が導入されず、社会的な理解の乏しさから、医療者を含め女性を責める言動も未だ少なくない。また中絶後の精神的なケアも遅れており、中絶が通常の「死別」とは異なり、「出会う」に至らなかった存在と「別れる」という、悲嘆の作業の困難さが見過ごされている（胎児は、生まれていないのだから死ぬこともできない）。

こうした日本社会の現状を踏まえて強く思うのは、女性に中絶を「してもらう」「させてしまう」潜在的位置にある男性にとって、これまで中絶という経験は分節化して受けとめることさえ難しく、無知のままその苦しみを軽んじるか、あるいはそこにある痛みにただ圧倒されるばかりであったのではないか、ということである（私が一人の女子学生に中絶の経験を打ち明けられ、何も応えられなかったように）。本書は、訳者の丁寧かつ誠実な仕事に支えられ、そうした「生むこと」と「中絶」の問題を受けとめるためにも、そして「親」や「家族」とは何かを考える上でも、著者の豊かな社会学的な認識へと読者を連れて行く一冊となっている。

【註】

1) 日本での「人工妊娠中絶件数」は、厚生労働省『平成 29 年度衛生行政報告例の概況』によれば、年間 164,621 件（1 日に約 451 件）で、「年齢階級別女子人口 1,000 人あたり」は「20〜24 歳」で最も高く 13.0 件、次いで「25〜29 歳」で 10.5 件となっており、統計上、20 歳代において約 100 人に 1 人の割合で人工妊娠中絶を経験していることとなる。

2) 後述するように、このようなかたちの書評を選択したのは、著者も評者も〈男性〉であるという問題も背景にある。妊娠や中絶において自らの生身が直接の現場となる可能性をもたない点で、〈女性〉と同じ意味での「当事者」にはなりえない私が、フランスでの聞き取りから中絶をめぐる経験のあり様に迫った本書について、具体性を欠いた抽象的な水準だけで考え、何かを論じることができるとは思えず、かつそうしてしまうことがおそらく中絶の問題をめぐる〈男性〉の社会的なポジションの一つの再演（構造的反復）でもあると思われた。

3) この象徴的構図をモティーフとした身ぶり――ある存在を《抱き寄せる》《抱っこする》《一緒のベッドで寝る》など――は、養子など必ずしも妊娠を介さずに子どもを「家族として迎え入れる」過程にもみられ、どれもが互いの皮膚を共有するような、《この肉にとっての肉となる》（≒この子にとっての親となる）という相互のかけがえなさの授受の表現でありうる。

（さわだ　ただと　大妻女子大学共生社会文化研究所・特別研究員）